



J カフェ + Zoom



～～ JAUW ヒューマンリソース活用プログラム ～～

JAUWが誇る最大のタカラは、会員のもてるチカラです。
 ここには、豊かな経験、広い知見、深い洞察があります。
 一緒に、新しい世界を発見、創出、共有しませんか。

第9回 カズオ・イシグロを長崎で読む ～多彩な語り手と移り変わる視点の意味～

2017年ノーベル文学賞に輝き日本でも愛読者が増えているカズオ・イシグロは、作品はすべて英語で書き、イギリス王室よりナイトの称号を叙任されたイギリス国籍の作家です。名前と風貌から明らかなように日本人を両親に持ち、1959年5才でイギリスに移り住むまで、長崎市内で幼少期を過ごしました。2020年8月被爆75年を迎えた長崎市へ、カズオ・イシグロは短いメッセージを寄せています。その長崎市内にこの3年間に生まれたカズオ・イシグロの複数の読書会に、老若男女の市民と共に素人として参加する講師に、何が見えているのでしょうか？カズオ・イシグロ世界の一隅で、一緒に一時をお過ごしください。

日時：2021年6月27日（日）14:00～16:00

場所：Zoomを使ったオンライン開催（コロナ禍のため、**全員 Zoom のみ**になります）

講師：鈴木 千鶴子氏（長崎支部会員、長崎純心大学客員教授）

募集人数：50名

申込：6月14日（月）までに

Google フォーム <https://forms.gle/4bHL4YLLZzYJLXz46> より

または、E-mail：j-cafe@jauw.org（Jカフェ専用）でお申し込みください。

振替を確認後、前日までに URL をお知らせいたします。

参加費：1,000円

振込先 ゆうちょ銀行 記号番号 10150-11757481

（他銀行から 普通 〇一八店 1175748）一般社団法人 大学女性協会

アンケート：Google フォーム <https://forms.gle/zxdjxktNuTpsZ45V9>（6月30日まで）



【鈴木千鶴子さんから：お話のポイント】 ミュージシャンを目指していたカズオ・イシグロは、「小説を書き出したのは26～27歳の頃。きっかけは、日本への記憶だった」「日本について書き終わるまで、日本には戻らないと決意しました」と言う。その語り手は、日本人女性から英国人執事、クローン人間からAIまで多様であり、皆記憶が曖昧など、“信頼がおけない”。そのことと、日本、さらに長崎とはどう関係しているのか、試論を開陳したい。

【プロフィール】 1945年生。1968年津田塾大学学芸学部英文学科卒；1971年ICU大学院教育学研究科修士課程修了；1978年純心女子短期大学専任講師、1988年同教授、2001年長崎純心大学人文学部英語情報学科長；2006年長崎大学大学院医歯薬総合研究科博士課程修了；2016年～長崎純心大学客員教授。新潟県、宮城県、長崎県、新潟県、東京都、長崎県に居住；英語学、教育学、社会医学を学ぶ。



- ★ 生涯学習委員会では、JAUWの人材を活かす活動を企画。他薦・自薦大歓迎！
- ・「災害の記憶をつなぐ」記録集：原稿募集中 ジェンダーの視点から、災害に関する経験や提言を収集
- ・Jカフェ：「あの人にあの話を聞きたい」（経験談、趣味の紹介、専門知識など）
- ★ 生涯学習委員会 Jカフェ専用メールアドレス：j-cafe@jauw.org



一般社団法人 大学女性協会 〒160-0017 東京都新宿区左門町 11-6 パトリシア信濃町テラス 101

T E L : 03-3358-2882 (月～金の10:00～16:00) / F A X : 03-3358-2889

E-mail : jauw@jauw.org / URL : <https://www.jauw.org/>

J カフェ通信 9号

～ JAUW ヒューマンリソース活用プログラム ～
 大学女性協会 生涯学習委員会 2021.2.6 発行

第9回 カズオ・イシグロを長崎で読む ～多彩な語り手と移り変わる視点の意味～

講師：鈴木 千鶴子氏（長崎支部会員、長崎純心大学客員教授）

日時：2021年6月27日（日）14:00～16:00

場所：Zoomを使ったオンライン開催

参加人数：38名（申込41名）

カズオ・イシグロを長崎で読む ～多彩な語り手と移り変わる視点の意味～

鈴木 千鶴子

はじめに

作家というものは、一作品を取ってみても誰にも一様な読まれ方をするとは限らない。読み手の関心と経験や、読まれる場所や時点での状況も大きく影響する。2017年ノーベル文学賞に輝き日本でも愛読者が増えているカズオ・イシグロは、今も現役で書き続けていることも手伝ってか、彼と彼の作品に対する読者の解釈は多様であると感じる。それは、評論を専門とする所謂専門家の間でも極めて多彩な評価が公表されていることから計り知れる。そして、カズオ・イシグロの生地長崎市内にノーベル賞受賞後に生まれた複数の読書会に集う様々な老若男女のこの作家に対する評価の幅の大きさにも表れている。

本話は、日本が先の第二次世界大戦（太平洋戦争）で敗れる一カ月余り前（1945年7月4日）新潟県内で生を受け、アメリカ軍が長崎市に投下した2発目の原子爆弾で廃墟と化した浦上天主堂を5歳で目の当たりにした後、その様子を記憶の隅に残しながら再びの新潟と東京で少女・学生時代を過ごし、1971年以来長崎市内に50年間住まう本報告者である一読者の、カズオ・イシグロ考である。

また、作家の複数の作品の間には、様々な関係があり得る。例えば、夏目漱石の『三四郎』『それから』と『門』の前期三部作ならびに『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』後期三部作のように連作の間に明らかな繋がりがありそれぞれ一つのテーマを追求するもの。あるいは、村上春樹の小説に限っても100を超える作品の間に、身近な人の失踪というモチーフが繰り返し使われる、など作家によっても作品群によっても多様である。寡作な作家といえるカズオ・イシグロの10点に満たない作品の間には、語り手が日本人女性から英国人執事、クローン人間からAIまで可成り多様、という特徴がみられる。同時に、それら多彩な語り手たちは皆、共通して記憶が曖昧など“信頼がおけない”と、される。

本話では、カズオ・イシグロ作品にみられる「多彩な語り手と、それぞれの語り手の定まらない視点が、長崎という所そして日本とどのように関係しているのか」について、長崎のいわゆる“じげもん”（“地元のもの”の意の長崎方言）ではなく余所者でありながら長崎に執心する本報告者が、主にカズオ・イシグロ自身の“語り”から、考えを巡らせる。

カズオ・イシグロ作品

まず、カズオ・イシグロの特徴について、作品中にあらわれる単語“float”の頻度と、語り手の多彩さ、の2点から観てみる。

(1) カズオ・イシグロ作品における単語“float”の象徴
 単語“float”を取り上げる根拠は、偶発的ともいえる極めて主観的な着想であった。長崎市に地方都市の町起こしを兼ね若者を中心に市民が立ち上げたカズオ・イシグロを「オカズ」をキーワードに五感で“味わおう”というプロ



ジェクト「オカズ・イシグロ」の2019年8月の例会で、短編集 *Nocturnes* (『夜想曲～音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』) を題材にイメージされるレシピを参加者の一人として考え思い浮かんだ一品、題して“漂う眺望の夏野菜ポンチ”，からの“漂う：float “のイメージを他の作品にも辿ったところ、次のようなことが見えた。

- i) 作品として取り上げた短編集を含めた9作品を通して，“float”の出現頻度は22回で、総語数概算 35万語に対して約 0.0066%。一方英語母語話者大規模コーパス（言語使用データ）Wordbanks の6億語における頻度は 0.0033%であることから、総語数が概算であることと、比率計算が尤度比ではなく単純比率という制約はあるものの、一定の傾向は仮定される。
- ii) 出現頻度率が0.01%を超える作品は、*A Pale View of Hills* (『遠い山なみの光』) : 0.015%, *An Artist of the Floating World* (『浮世の画家』) : 0.014%, *Klara and the Sun* (『クララとお日さま』) : 0.014%, で初期の日本を舞台とする2作（1982年；1986年）と最新作（2021年2月）である。

なお、*An Artist of the Floating World*で頻度が高いのは当然とも言えるが、タイトルを表記した中での使用は除いた数値である。

- iii) 作品中の“float”との共起語で頻度の高いものは、通常浮かんだり漂うものではないもの、つまり意外なものが多い傾向が観察される。以下に作品より代表的な例文をあげる。

(ア)*A Pale View of Hills*では、語り手である主人公悦子の虚像ともいえる佐知子が、川に浮かび流れる「野菜の木箱」を、さらに力を加えて沈め流す場面で、繰り返し現れる。

... up the wire-grid. She continued to hold down the box, then finally pushed it with both hands. The **box floated** a little way into the river, bobbed and sank further, Sachiko...

(イ)*Klara and the Sun*では、語り手でAI人形クララの持ち主となりクララが相手をするようになる少女ジョジーが、絵を描いては千切りその紙片を空中にまき散らし、浮遊させる、ことを繰り返す行で現れる。

Each time she finished a **picture**, or decided to abandon one, she'd **tear it out and toss it into the air**, allowing it to **float** down onto the rug, and it became my job to gather these sheets together into ordered piles.

〔注〕作品の言語データは、公開されている faber and faber の kindle 版で、出現数は 検索機能を利用。

(2) カズオ・イシグロ作品における語り手の多彩さとユニークさ

作品の語り手の前に、作家としてのイシグロについての評価は、作品についても含め次の様々な言葉で表現されているように、多彩である。

- 境界の無い、ボーダーレス作家、インターナショナル作家、ホームレス作家
- 感情の激しい変化
- 記憶の曖昧、記憶の歪み、記憶のねつ造、記憶の食い違い
- 価値の転換での身の処し方
- アイデンティティ、フェミニズム
- 不条理、希望
- 薄明
- トラウマ、喪失感、罪悪感
- 忘却への欲望、と、ノスタルジア
- 難解・複雑：“途中で読まなくなる”・・・
- カラフル

それに対して、カズオ・イシグロ自身は、「ポストコロニアルやフェミニズム等々の枠で語られたくない」と更なる可能性を求めている。

ここでの本題である作品の語り手に焦点を当てて、同じく9作品を調べてみると、語り手の多彩さに加えて、その視点、と舞台、と時代、に関して、次のようなことが観察された。

- i) 視点の流動・交差性がある。これは、一定の読者から聞かれる「読み続け難さ」に繋がるもの

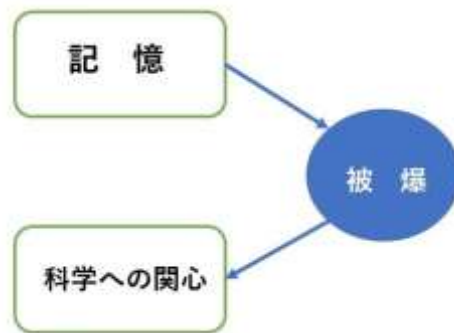
であろう。それを例示する作品は、*A Pale View of Hills* (『遠い山なみの光』), *Nocturnes* (『夜想曲』の「チェリスト」), *The Buried Giant* (『忘れられた巨人』) であり、これらには重層的な複数の語り手が登場し、視点が交錯する。

- ii) 視点が入り乱れる文体の特徴は、他の作家としてヴァージニア・ウルフにも見られ、それは「アイデンティティの見極めと変容 (transformation の) への模索」の表れ、との解釈があり、イシグロにも当てはまる可能性がある。
- iii) 上記のことは、イシグロ自身による「私は、自分が全世界のあらゆる歴史とあらゆる地図を所有しているかのように感じている」(2015年)との発言と関連しており、カテゴリーやジャンルに縛られる無意味さを主張していると考えられる。それは前節のポストコロニアルやフェミニズムの枠に縛られたくない、との発言と呼応している。

この語り手の多彩さと不安定さから覗える、イシグロの「時空を超える普遍的価値」探究の欲求は、どこから生まれてきたのであろうか、次に推論を試みる。

カズオ・イシグロの記憶と科学への関心

イシグロが語られる時、多彩な評語の中でも最も頻繁に現われ存在感のある「記憶」。また、語り手の多彩さの中で注目されるクローン人間と AI、という「科学」の発達の成果物。では、イシグロ自身の記憶は、どこから始まり、どのような特徴を持ち、科学とはどのように関係しているのか、彼自身の発言を辿ると下のような構図を仮定することができる。



カズオ・イシグロは、長崎に原子爆弾が投下された9年後に市内で生まれ、父親の転勤に伴いイギリスへ渡るまで、記憶が後年まで留まり得る年頃の5歳までの幼少期を、長崎市内で過ごした。その時期の記憶が自身より語られている中で、次に引用するノーベル賞受賞式後の晩餐スピーチは、被爆体験者である母親から“原爆のおそろしさ”と、“科学革新の成果、発明品の使い方の慎重さ”、“ならびに”世界の平和の尊さ“を伝えられ理解した瞬間を明示しており、印象的である。

- ・・・・5歳の私は、日本の伝統的な「畳 (タタミ・マット)」の上うつぶせに寝そべていました。その瞬間が記憶に刻まれているのは、おそらく背後からきこえてきた母の声、ダイナマイトを**発明**したものの、**その使われ方**に心を痛めてやがて「ノーベルショウ」というものを創設したというその男について語るときの、その声が何か特別な感情をたたえていたからでしょう。「ノーベルショウ」、その名を私は日本語で初めて耳にしたのです。「ノーベルショウというのはね」と母は私に語りました。「ヘイワ (平和や調和を意味する日本語) を広めるためにつくられたものなのよ」。私たちの故郷である長崎が、**原爆によって壊滅的に破壊**されたわずか14年後のことです。幼かった私は、「平和」というものが**何か大事なものだ**ということを直感的に知っていました。**それなしには、「何かおそろしいもの」が私の世界に迫ってくる**、ということ。・・・(太字は報告者) —板垣麻衣子「ノーベルショウ」イシグロさんに刻まれた母の日本語 (2017.12.11) より—

カズオ・イシグロ自身は、平和が戻った時代に恵まれた環境で成長し、温厚な性格は語り口からも伝えられ、その作品は時にユーモアを湛え希望をうかがわせる向きもある一方で、作品の多くは、どこかに“おどろおどろしさ”と“とでもいえる”何かわからぬ恐ろしさ”が感じられる所以と、この5歳の記憶は無関係ではないと思われる。

“書く”意欲の源泉と発展を自身の語りから探る

このようなイシグロの「記憶」と「科学への関心」が、小説を“書く”意欲として20歳代半ば過ぎの

1980年代初頭より自身にも意識され、人々に読まれる作品として世の中に出ていくことになる。その様子は、次に抜粋するノーベル文学賞受賞記念講演『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレイクスルー』（2018）土屋政雄訳 から読み取ることができる。（太字は報告者）

- ですが・・・ある夜のことで。その部屋に住みはじめて3週間目か4週間目のことだったでしょうか。ふいにこれまでにない差し迫った思いに取りつかれ、気がつく、私は日本について—生まれの町、長崎について—**第2次世界大戦の終戦間際の話**を書き始めていました。 <p. 13>
 - 異（多）文化を書くことが普通ではない中、（大量の）**記憶を保存する**必要に駆られた
- たとえ舞台がきわめてイギリスらしい世界だとしても、私の物語には、**文化的・言語的な境界を容易に超えていく「国際性」**をもってほしいと思いました。 <p. 51>
- 私たちは何を記憶するかをどう選択したらいいのか。忘れて先へ進んだ方がいいと、いつ言えるのか... <p. 63>
- 1999年44才、アウシュビッツ強制収容所跡の見学の時のこと
- **記憶しておくという責務**が、私たちの世代に引き継がれるのだろうか。私たち自身は戦争の年月を体験していませんが、その私たちを育てた両親の世代は、**否応なく人生に戦争を刻み込まれています**。物語を公に語る者である私は、いままで気づかずにいたけれど、その責務を引き継ぐ立場にあるのではないかと、**両親の世代の記憶と教訓を、できるだけ力を尽くして、次に来る世代に伝える義務があるのではないかと**... <p. 65>

その独自の記憶と経験を源泉とした小説を“書く”意欲と原動力を、さらに国家間の戦争や科学革新の誤った利用を防ぐ方向へ向けたい、という意思の表明を、次の言葉で果たしている。

- “私の小説には、**社会的・政治的に大きな混乱の時期を生きた人の物語が多い**・・・その人物は自分の人生を振り返り、**暗く恥すべき記憶**となんとか折り合いをつけようとする“
- 私の答えは、自分でもまったく思いがけないものでした。はい、と答えました。これまで、**忘れることと記憶することの間で葛藤する個人**を書いてきたが、これからは、**国家や共同体がこの問題にどう向き合うかをテーマ**に書いていきたい、と。 <p. 67>
 - これからもそうか？との質問に答えて（1989年訪日時発言の回想）
- 国家の記憶とは、・・・どこに保存されているのか。・・・**暴力の連鎖を断ち切り、社会が混乱と戦争のうちに崩壊していくのを阻止するためには、・・・意図的な健忘症と挫折した正義を地盤として、その上にほんとうに自由で安定した国家を築くこと**などできるのか。私はそういうことについて書く方法を見つけないが、残念ながら、いまのところどうやっていいかわからずにいる****。 <p. 69>

そして、イシグロは現在の世界と人々の非常事態ともいえる安心できない困った状態を、次のような言葉で表現している。

- さて、現在です。（2017）・・・
- ここ何年か、泡の中に生きてきた。私を取り巻く世界は教養と刺激にあふれ、**リベラルな考えをもつ皮肉っぽい人々が集まっている**
- テロ行為が頻発、・・・**リベラルで人道主義的な価値観を**・・・それが幻想だったかもしれないと
- 一致団結できる進歩的な大義は、まだ見えない
- 民主主義国でさえ、人々は分裂し・・・
- **科学技術や医療の分野**で従来の壁を破る発見が相次ぎ、そこから派生する**脅威の数々が**、・・・
- 新しい遺伝子編集技術、人工知能やロボット技術にも大きな進展
- 人命救助の利益、と同時にアパルトヘイトにも似た**野蛮な能力主義社会**を出現させ、
- **社会が巨大な変化に適応しようとするとき、議論や争いや戦い**が起こります。そんな争いに新しい見方を与え、**感情を伴わせるための一助**となる何か、私にまだ残されているのでしょうか？
- 私は投げ出さず、**最善を尽くさなければならぬ**でしょう。なぜなら、**文学は重要であると—この困難な地平を渡っていくためには一層重要であると**信じています。若い世代の作家が頼りです。若い人々が私たちに閃きを与え、導いて・・・

この最後に挙げた文学の役割について、自身が出来る唯一で最大の貢献であろうとの思いは、2015年に行われた『忘れられた巨人』出版記念のインタビューの時点でも明瞭に表現されていた。その代表的

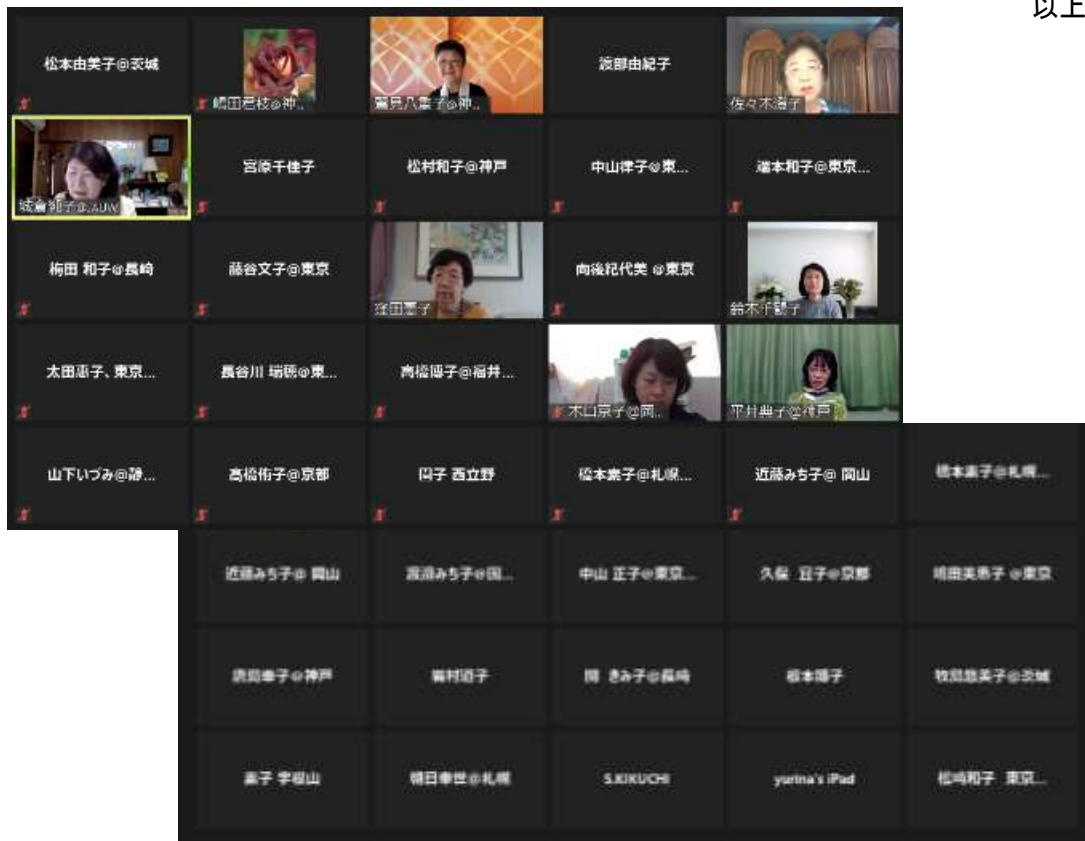
な部分を以下に引用する。(河内恵子訳『三田文学』No. 123; 太字は報告者)

- ・ 2001年に言いました。社会や国家がものごとをどのように記憶するか、そして、どのように忘れるか、と言うことを書きたいと
- ・ 内乱が起きそうな国、トラウマとなるようなことを最近経験した国、・・・おそろしいことを忘れることで平和にいきいこうとする、でも...
- ・ 私は、第二次大戦のような大きな時代を生き、そして新しい世代が登場してくるのを見ていた個人に対して、何か非常に痛切なものをいつも感じます。
- ・ セッティングは違っても作品の根底にあるテーマは同じ
そして、最新作『クララとお日さま』出版記念インタビューで、その文学者としての使命を、AIに語り手を設定することで人間を見つめなおし、人間にとって真に普遍的な価値を浮き彫りにするもの、へと進展させたことが覗える。それを示す部分を以下に抜粋引用する。(河内恵子訳『三田文学』No. 145; 太字は報告者)
- ・ 深く深く重要な物事を思い出させることができればと願っています。
- ・ 私たちがお互いの間に築いた関係性、家族の中における絆、愛を求める姿勢、より大きな共同体のために何か価値のあることを成し遂げたいという望み・・・
- ・ すべてのものが普遍的で永久的だと私は思う
- ・ それと共に私たちの弱さや私たちの失敗や私たちの恐怖といった否定的なこともまた・・・
- ・ 人間であるということには根本的な何ものかが存在するというを、未来の人たちに思い出させる何かを残していくことが大事だと思っています。

おわりに

カズオ・イシグロが、多彩で他者と交錯までする捉えどころのない語り手たちが記憶も不確かであいながら生きる様を描くことを通して、何を読者に伝え与えたいのか、時空を超えた普遍的価値、誰しもが良しとする真理を、揺さぶられ彷徨いながらも探し当て獲得しようとする。それは、生を受け5歳まで過ごした長崎で、母親を通して感じ取った“恐ろしい”戦争と原子爆弾を、克服できる唯一の道・方途と思いいたっての営みではないか。このような一考察を、参加いただいた方々と共有できたことに、心より感謝いたします。

以上



◆「カズオ・イシグロを長崎で読む～多彩な語り手と移り変わる視点の意味～」を聴いて

カズオ・イシグロ 2017年ノーベル文学賞受賞 イギリス国籍の作家（両親は日本人）
1959年5歳で渡英、移住。幼少時を長崎市内で過ごす。母親は長崎で被爆
鈴木講師 津田塾大学学芸学部英文学科卒、ICU大学院教育学研究科修士課程終了。純心女子短期大学専任講師、教授、長崎純心大学人文学部英語情報学科長などを経て現在は同客員教授。長崎大学大学院医歯薬総合研究科博士課程修了。英語学、教育学、社会医学を学ぶ

講演後のアンケートに回答下さった方のうち22名の方から自由記述が得られた。

ノーベル賞受賞もあり、著作を何冊か読んだ人、積読だった人など。

「日の名残り」「私を離さないで」を読んだ人が多かった。

「クララとおひさま」最新刊未来小説

判りにくい、どう理解したらよいか、途中で投げ出した人も少なからず。

副題にある様に視点が移動するのでわかりにくいのかもかもしれない。

刺激的な話⇒ものの見方・考え方の再考。

鈴木講師の話聞き、イシグロの本をどのように読んだらよいか、解釈したらよいか疑問が解けた参加者も多く、これを機会に読んでみたい、更に読みたいという人が多かった。

本はどのようにでも読める。正解がある訳ではない。見方・解釈の多様性に気づいた参加者も。

文学の力・小説の力を再確認できた方も。

著作については、臓器を提供するために生かされている人やクローン人間の話などもあり、生理的に受け付けられない人も少なくなかったかもしれない。

恐れや記憶・忘却に関する考え方についても気づきがあった。

各著作の特徴を語り手の属性 国籍、性別、年代 などで分類し、分析・考察。

多出語句による分析 など 講師の分析方法は多岐にわたり、参加者の関心を引いた。

鈴木講師の話をもっと聞きたいという参加者が多数あった。

この企画に対する感謝の言葉も多く、良い企画であり、大成功と言える。

特にオンラインでの提供だったため、遠隔支部からの参加も多く、特に喜ばれた。

(牧島悠美子 記)

【アンケートから 感想】

- イシグロ氏の本を購入したまま、読んでいませんでした。鈴木さんの話は絶対に面白だろう、きっと、本棚に置いたままのイシグロ作品を読みたくなるだろうと今回参加しました。早速、読もうと思います。資料でいただいた「素人にしか知り得ない未来」は、イシグロ氏の感性に似ているのかなあ、という感想です。したがって、鈴木講師は、onna ishiguro とこれから呼ばさせていただきます。ありがとうございました。(I.Y)
- 今日は思いがけない視点からのお話、面白うかがいしました。作品の中に出てくるオドロドロシサは原爆の体験からかなとお話を聞きながら感じました。クララや孤児だったころなどから母親に対するかずおの思いの深さを感じ、それとAIとの絡みが興味ありました。皆さんのお話をお聞きしながら、ノーベル賞の受賞に納得いたしました。ありがとうございました。(Y.T)

- カズオ・イシグロの「わたしを離さないで」をみたとき、「このような世界はわかっているつもり」でしたが胸が苦しくつらい、大事だけれど遠ざけたいと思いました。ので、もう少し客観的に向き合いたいと思い今回の「Jカフェ」に参加しました。鈴木さんの言われた”感情の揺さぶり”をかけられたからだったのでしょうか？ 今日のご講演でカズオ・イシグロについて深い分析・考察をいただき、「人間として、科学も感情もバランスしていくとユートピアが見える」という世界のあり方を考えてみたい、他の作品も読んでみたいと思いました。
貴重なお話をありがとうございました。また、皆様のご意見も参考になりました、ありがとうございました
♥(H.T)
- 神戸支部では25年ほど前から同好会として「読書会」を開いておりました。
第一作目は、カズオ・イシグロ作の「日の名残り」を、その数年後「わたしを離さないで」を取り上げました。どちらも日本語訳でしたが、あらずと作品の歴史的背景を追うのが精いっぱい、作者の作家魂の根底にある哲学までにはたどりつけなかったことが苦しい思い出されます。
日本育ちであり、被爆した母を持つ作家が、英国人作家としてブッカー賞を得たことが何よりも心地悪く、長崎とは切り離せないキリスト教を素通りするような作風が信じられないものと感じていました。
しかし今日、鈴木千鶴子さまのご講演をうかがい、初めてこのカズオ・イシグロ文学の真髄に触れることができ、刮目した思いでいっぱいでございます。
キリスト教的宗教感が根付いたヨーロッパ文学でもなく、アナーキスト的無神論でもなく、むしろ禅宗に近い生死の悟りをバックボーンにもつこの作家が平和を祈念するノーベル文学賞を獲得した解説をお示し頂き、カズオ・イシグロの普遍的な文学の強い力を信じることができました。本日の講演及び企画された皆様に心からお礼を申し上げます。
「Jカフェ」のお誘いを、これからも楽しみにいたしております。
今後ともどうぞ、よろしくお願いいたします。(N.H)
- 原爆の追体験が背景にあることがよくわかりました。(Y.M)
- 鈴木さんの視点がユニークで、違った角度での小説の読み方に関心を持った。(K.U)
- 私にとっては彼の作品は「日の残り」のみを読んでいるだけだったが、今日の鈴木さんの講演でビックリしてしまった。漂う、フローティングという表現だけであれだけの世界がありその食べものまで皆で考え作品まで作る、なんて素晴らしい読書会だと鈴木さんの計り知れない別の面を見た気がした^^
今日の1時間半はすごく貴重な時間だったこと改めてお礼申し上げます^^
今後鈴木さんのお話をもとに彼の作品読んでいきたいと思う。(F.F)
- 恐れや記憶について、なるほどとかそういう考え方もあるとかいろいろと考えさせられました。
他の方が話しているときはミュートにしておいてほしいです。相槌もうるさいものです。(Y.M.)
- 初めて参加いたしました、居ながらにして貴重なお話を伺うことができとても勉強になりました。(N.K)
- 大変刺激的なお話でした。ノーベル文学賞を受賞した意味がクリアになりました。ありがとうございました。(Y.S)
- とても良い雰囲気での始まり、講演はもちろん、JAUWの一員としてのひと時を楽しむことができました。「Jカフェ」の生涯学習の場としての意義を大いに感じ、前委員長と現委員長の努力に感謝いたします。オンラインで遠方の支部の方々の参加が実現しました。支部と本部の一体化を目的に掲げるJAUWとしては、今後もこの路線で会員間の交流の拠点とならしめるべく協力をしていきたいと思っております。
鈴木理事のお話は、示唆に富んでおり、カズオ・イシグロをより深く理解する機会となり、心より感謝しました。彼の普遍性を追求する姿勢が、長崎での体験と深いつながりを持つことを改めて認識できました。「文学」ができることや文学の可能性を信じることができました。ありがとうございました。(J.J)

- ノーベル賞受賞後 カズオ イシグロの恩を3冊読み その後忘れていました。
色々な解釈を伺いとても面白く又別な作品を読もうとおもいます。
先が見えないというか手探りの幹事の刷る作品ですが読後の重量感が何なのだろうとおもうそこが力なのでしょうか？(M.S.)
- 私にとっては彼の作品は'日の残りのみを読んでいるだけだったが、今日の鈴木さんの講演でビックリ!?してしまいました。漂う、フローティングという表現だけであれだけの世界がありその食べものまで皆で考え作品まで作る、なんて素晴らしい読書会だと鈴木さんの計り知れない別の面を見た気がした^_^
今日の1時間半はすごく貴重な時間だったこと改めてお礼申し上げます^_^
今後鈴木さんのお話をもとに彼の作品読んでいきたいと思う。(F.F)
- イシグロさんの本作品があんまり好きでなかったのに、ピンとこなかったのですが、
そういう見方もあるのかと思いました。でももっと読んでみたいとは思いませんでした。(K.M)
- カズオイシグロの著作は、興味があり数冊購入しましたが、途中まで読んだだけで積んであります。昨日のお話や皆様のやり取りで、あらためて関心を覚えましたので読んでみようと思います。また、昨日のお話の中で「忘れることと記憶することの間で葛藤する個人を書いてきたが、これからは、国家や共同体がこの問題にどう向き合うかをテーマに書いていきたい」との彼の言葉が強く心に残りました。私が政治という仕事に携わるため、「歴史認識」、「戦争責任」は避けて通れません。この問題に起因する思想の系譜が「夫婦別姓反対」、「LGBTQ 反対」、「岡山県家族教育応援条例制定」などの様々な動きに繋がっていることを考えながら聞いておりました。久しぶりに文学に浸った時間でしたし、文学の大切さを実感しました。ありがとうございました。(K.K)
- カズオ・イシグロの作品は1つしか読んだことがありません。英語で読んだのですが読んでいるうちに段々嫌になり、何が言いたいのかよくわからずじまいでした。鈴木さんのお話の冒頭に私のようなことが起こる理由を述べられていて、納得しました。他の作品を読んだことがないのですが、鈴木さんのお話を聞き、読んでみようかな〜という気になりました。とても興味深いお話でした。自宅に居てこのような企画に参加でき、とても有難かったです。本当に久しぶりに会員の皆さまのお顔を拝見できて、それとても嬉しかったです。お話してくださった鈴木さんはじめ、お世話してくださった皆さまに心からお礼と感謝を申し上げます。(M.K.)
- 私は佐賀県出身で、長崎原爆で父の従兄弟2人が即死、伯母が3週間後に亡くなったと聞いています。映画 "The Remains of the Day"を見てから原書に当たりました。現在の人物に惹起する過去の記憶が印象的でした。私は昔英文学専攻で、特に Virginia Woolf, "The Waves" を取り上げたのですが、現在の人間は過去の経験、記憶の積重ねなのだろうと思えます。近年大学では文学部が実学に取って代わられている中、カズオ・イシグロ氏の文学の復権とも期待される「分断の壁を破る、乗り越える」という志向性、人間の抱える非人間性への警告など問題提起の力強さを確認しました。OKAZU ISHIGURO の取組み、面白かったです。講師のご経験豊富さ、ご挑戦の数々感銘致しました。本当に有難うございました。(Y.K)
- 素晴らしいお話を有難うございました。イシグロ氏を深く研究された方のお話はとても充実していてイシグロ著書に今一つ把握できないところがありましたが、すべて解消された、との感を持ちました。
勿論そんなに簡単なものではない事も含めてとても有意義で楽しいお時間でした。
これからもこの様なご講義を是非お願い致します。
鈴木千鶴子先生、Jカフェの皆様有難うございました。(K.O)
- 鈴木先生のオンライン講座に参加させていただき、本当にありがとうございました。
先生に教えていただいた「ある語に着目し、メンバーの方々の五感を加え、そこから解釈を繰り広げる」独創的な方法を、『日の名残り』(The Remains of the Day) に使ってみますと、「品格」(dignity) が、目視で26回現れました。しかも、その出方にかなり統一性があり、ナレーターの執事論に集中していました。「品格」は、彼の眼前に広がる、他国が持ち得ないイギリスの自然だけにそなわる「品格」に始まり、次に、大陸の人々にはみ

られないイギリス国民固有の「品格」、その後、イギリスの執事を、最高の「品格」モデルとみなすナレーター自身の執事としての「品格」にまつわる35年間のエピソードが続きます。「品格」は、イギリスの気風であったと改めて気づかせられました。

しかし、読み進むと、鈴木先生が言われたように、解釈がわかりづらくなりました。後半の章で、執事の品格を、一瞬たりとも失わず完璧に遂行しようとするナレーターが、ミス・ケントンに対する私情の板ばさみになる決定的瞬間が訪れます。それを必死で制御したことに、彼は高揚と勝利の感を味わうのです。しかし、20年後、彼女との永久の別れになるだろう場面では、品格をかるうじて保ちつつも、その心は完全に打ち砕かれたと読者に告白、ついには、見知らぬ男の前で涙を流すことになってしまいます。

執事の品格を保ち続けようとするナレーターの雄姿の裏に隠されているミス・ケントンへ20年間抱き続けている想い、この二重性を、今回ご参加されているすばらしい先生方だったら、どのように考えられるでしょうか。できるものなら、今回のような意見交換に、この疑問を投じてみたいと思った幸いです。(K.S)

- カズオ・イシグロは2作品しか読んでおらず、事前にもっと読んでおけばよかったと準備不足を痛感致しました。鈴木先生が若者世代も巻き込んだ様々な面からカズオ・イシグロを研究されていることに驚くとともに、タイトルの長崎で読むの意味がようやくわかりました。カズオ・イシグロの世界を読み解く大きなヒントをいただき、また徐々に文学の持つ力、文学だからできるアプローチがあることに気付かせていただき、様々な面から学ぶことの多かつたとても密度の濃い時間を参加者一同で共有することができ、大変感謝しています。また鈴木先生よりいろいろな気づきをいただけることを期待しています。(Y/W)
- 最近、小説をあまり読んでないので、お勧めいただいた「クララとおひさま」を早速読んでみようと、手っ取り早く地元の図書館をネットで探してみました。なんと待ち行列が164人！購入する方がはやそうです。実学にどっぷりと嵌っている現在、深読みはできないかもしれませんが、挑戦してみます。(K.S)

(以上)